仮)極龍我

鳥龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮）極龍我

【Ｎコード】
Ｎ１８７７Ｈ

【作者名】
鳥龍

【あらすじ】
まだ小説のラストを作ってないから、あらすじが書けません。なので、完結してから書きます。＃更新は気まぐれです。

プロローグ

俺の名は剣斬。このザガス国の戦士である。
そして今日、三年以上争いを続けてきた隣国を倒した。これでまた、我らがザガス国の勢力も強くなった。
残る国はこのザガス国も入れて三つ。
北のザガス。西のウォーレ。東南のゲルグ。
今一番強い国は、東南に勢力を広げるゲルグ。
そして今宵、勝利の宴をやるらしい。俺も招待された。
しかし俺は、自ら断った。何故なら、俺は人の多い所は好まない。
それに俺は誇り高き孤高の戦士。独りで居るのが正しい。
そう思う。
自室は広くなく、寝床に鎧置き場などと華やかな物など一切ない殺風景な部屋。
相棒の剣、極龍我を手に取る。鞘から抜き月明かりの下、刃をよく見てみる。すると所々が欠けているのがよく分かる。
……無理もない。
何ヶ月も手入れしてないからな。
袋から研ぎ石を取り出し、刃を優しく研ぐ。
シャァッ、シャァッと擦れ合う音が静寂の夜に響く。
……勝利した褒美に、新しい剣でも貰うかな。
そんなことを頭の片隅に置きながら研いでいると、欠けた所が綺麗になっていた。
ふと見上げた月が、赤くぼんやりと闇夜を照らしていることに気がついた。
俺はその月に剣をかざした。
すると突然、剣が白い光を放ち始めた。あまりの眩しさに目を硬く閉じる。
光が弱くなったのを感じ目を開けた俺の手の内に、極龍我はない。

だが、代わりに一匹の龍が宙に浮いていた。
「お前は……もしかして……」
「我が名は極龍我。そなたの剣（つるぎ）である」
勘は当たっていた。
「何故、剣のお前が龍の姿をしている？」
「そなたが何故戦うのか、その理由を知りたい」
「戦う理由？　そんなの、我らがザガス国のために決まっている」
「ほう。そなたは今までの者たちとは違うようだな」
「今までの者たち……？」
「左様」
今までの者たちとは、極龍我の前の持ち主たちらしい。
「今までの者たちは、どんな理由だった？」
「愛しき者を守るため……そう言っていた」
「愛しき者……？」
はっ、と窓を見ると、極龍我が剣に戻っていた。
俺はしばらく極龍我を眺めていた。そして、もうしばらくコイツを使っていくことにした。

第一章　其の一

俺は久しぶりに、戦いの時以外で外に出た。だが今日は、あいにく曇りだ。

しかし、街は活気に溢れている。

不思議なものだ。

俺は街を通り抜け、ひっそりとした荒れ地に来た。そこをもう少し進むと森がある。

そこは、絶対に入ってはならない森と言われる「禁断の森」がある場所。入れば厳しい罰を受けると言う。

しかし俺は、王から直々に許可を頂戴している「禁断の森の管理者」だから、入っても大丈夫だ。

もう1人、夜龍（やりゅう）と呼ばれる同士が居る。そいつも禁断の森の管理者だ。

此処が禁断の森と呼ばれているのは、野獣たちが居るからだ。しかし俺にとっては、どいつもハエだ。

前はそう思っていた。

森に入り数日の間は何もせず、野獣たちを観察していた。が、ある日、いきなり話しかけられた。初めは、ここに来る理由やら何やら、どうでもいい話だった。何かと話したり、一緒に居ると、以外にも野獣たちはいい奴らばかりだと、分かるようになった。

三年間の戦争中は、一度も戻って来てない。

……この森に来るのも、随分久しいな。

緊張と嬉しさと懐かしさでドキドキしながら、一歩踏み入れる。すると、近くの木の陰から見覚えのあるちっちゃい奴が出てきた。

そいつが俺に気づき、大声を上げた。

「うおぉぉぉぉぉぉ！　お前、まさか……剣斬じゃねえか！？」

「おう。久しいな。樵（きこり）」

「長い戦いだったな！　ザガス国が勝利したんだってな！！！？

俺、すっげぇ嬉しいぜ！！」
　樵はそう言いながら、興奮していた。
「当たり前だ。俺の軍隊を舐めんなよ」
　そう言って樵に笑って見せた。
　ふと、辺りを見回すと、見覚えのある奴らがたくさん居た。
　見覚えのない奴らも少なからず居る。
　あちこちから俺の名前を呼ぶ声や、勝利を祝う声なんかも聞こえてくる。
　俺はそいつらに声を掛けられ、奥の湖へ行った。
　そこには、縄で縛られた人間が三人居た。
　男二人に女が一人。
　男二人は猟師らしい。近くに銃が二つ転がっている。女は、幼さの面影があるところから見て、多分、少女らしい。
「お前ら、銃を持って何しに来た？」
　俺は一人の男に刀を突きつけ、問いた。
　禁断の森に入る許可を貰えたのは、禁断の森に入った奴らを処罰して欲しい、と言う理由からだ。
　刀を突きつけられた奴が喋り始めた。
「そ、それが……。鳥を追いかけてましたら……こ、ここに……」
「鳥とは、どんな鳥だ？」
「た、鷹……鷹です」
「鷹？」
　俺は樵に目をやった。樵は首を横に振った。
　このザガス国に、鷹という鳥は存在しない。
「貴様ら、シュー国の者か？」
　シュー国とは、三年の時を経て、ついこの間手に入れた隣国のことだ。
　シュー国には鷹という鳥が存在すると聞いた。
　俺の問いから、暫し沈黙が流れた。

「……我らはシュー国の者です」
刀を突きつけられていない奴が答えた。
「シュー元国王の命(めい)か？」
「はい」
そいつは次々に出す俺の質問に、正直に答えていった。
「これが最後の問いだ。この森に入れば処罰される、と言う事も知っていて来たんだな？」
二人の顔が強張った。
俺は近くに居る野獣たちに声を掛け、男二人を湖に沈めるよう言った。一匹の大きい野獣、猿(さる)が男二人の後ろに立ち、湖の側まで連れて行った。そして猿は、男どもを湖に蹴り落とした。

其の二

俺は少女の方を振り向いた。
少女は俺と目が合うと目を見開いた。顔が青ざめていくのがよく分かる。
「貴様は、何故ここへ来た？　女だろうが子供だろうが、容赦はしない」
少女の小さい体が小刻みに震えている。だが、どんなに待っても話す気はなさそうだ。
「言え！」
俺は刀の切っ先を少女の喉元に突きつけた。
「待ってくれ！」
樵が焦った様子で間に入ってきた。
「この子は、話せねぇんだ。何故かは分からねぇけど……。すっげぇいい奴だって、俺、分かるんだ。剣斬が来るまで、俺たちでこいつのこと見張ってたけど、何もしねぇし……」
「うるせぇ！！」
俺は樵の言葉を遮った。
「ここに入った奴らは処罰する。それが、忠誠を誓った我がザガス国王の命」
「お前は、人の命と王の命令と、どっちが大切なんだよ！？」
「……！！！？」
思わず黙ってしまった。
確かに俺は、多くの者を処罰してきた。だがそれは、ザガス国王の命令だからしてきたこと。
人の命と王の命令……。
どっちが大切か、だと……？
「俺は……。……」
王に忠誠を誓った俺にとって、王の命令は絶対である。

しかし、命も大事だ。
だが、しかし……しかし！！
「剣斬」
ハッと顔を上げると、この森の長が立っていた。
「今のお主にとって、どちらが大切なのかは分からんかもしれぬ。しかし、命の重さや大切さは知っておるじゃろう。わしらも、お主の王への忠誠心が強いことを知っておる。じゃからここは、この少女をこの森へ住まわせる、と言う意見にまとめてはどうかのぅ」
「こいつを……此処に？」
「そうじゃ」
確かにいい案だと思う。しかし、王は俺に、森に入った者を処罰するよう申された。
……そうか！
この森から出さなければ、生かしていてもいいのかもしれない。
俺は樵の横を過ぎ、少女のもとへ行った。
横へ下ろした刀を、再び、少女の首の高さへ持ってくる。
「剣斬？」
樵が緊張した面もちで、俺に問い掛けた。
「長の意見に賛成しよう」
そのまま刀を軽く振り下ろした。すると縄が解け、少女は束縛から解放された。
「だが、こいつをこの森から絶対に出すなよ」
そう言って俺は森を出た。
西の空は既に、朱を帯びていた。
それから用のない日は毎日、あの森に行くようにした。
禁断の森のもう一人の管理者。夜龍。
俺より年が二つ上で、剣が強い。それに周りからの信頼も厚い。

友や家族の居ない俺にとって、その存在価値は大きい。友であり兄であり……国王以上に信頼出来る人間である。
彼の地位は本部の少佐補佐。俺より下の地位。理由は分からないが、多分、俺の父と呼ばれるものと国王の関係で、生まれながら本部の大佐になったのだ。と、俺は考える。
俺の信ずる友は、夜龍一人である。
俺が忠誠を誓った王は、ザガス国王一人である。
そして、俺は彼らを信じている。

其の三

少女をこの森に住まわせて、半月ほど経った。野獣たちと少女は毎日のように遊んでいる。
昔から少女を知っていたように警戒心も、不信の色すら、微塵もない。
俺は少女を避けるようにしていた。
高い木の上で、少女の遊ぶ光景を眺める。
「剣斬」
樵が俺の隣に来た。
「何だ」
出した声の不機嫌さに腹が立つ。
相手は少女ではなく樵だ。なのに、不機嫌さが増すばかり。
「何だよ、怖い声出しやがって。まあ、いいや。何でお前、コウと話さないんだ？」
「コウ？」
「俺たちがあの子に名前を付けたのさ。「光」って書いて「コウ」。いい名前だろ」
そう言いながら樵は笑っていた。
「アイツは、話せないんだろ？」
「テレパシーを使うぜ」
ふ～ん。と言って、下を見ると、少女が上を見上げていた。
少女、いや、光に刃を向けたこともあって、初めは、俺を見る度に逃げ回っていた。しかし、何もしないと分かったのか、最近はこっちを見ることが多い。
だが、テレパシーで話し掛けられた事は未だ無い。
「おう」
突然、樵が何か言い、下に降りた。
「剣斬も来いよ」

「何故だ」
「光がよぉ、お前と遊びてぇ、って」
「黙れ！　俺はあくまでも、この森の管理者だ。そんな奴と遊ぶために来ているんじゃない！」
俺自身、この発言に驚いた。今まで樵たちに怒鳴ったことなど、滅多にないからだ。
樵たちも相当驚いていた。
「剣斬、お前、最近どうしたんだよ……」
「いや……悪い」
俺も地に飛び降りた。
埃を払い、前を見ると光が立っていた。想定外の事で焦る。
「な、何だよ」
地より低い声。それに構わず、光は近付いて来る。
俺の体が震えているのに、気付いた。光に怯えるかのように、体が激しく震える。
「剣斬」
ハッとなって、樵の元へ逃げるように歩み寄った。
「どうしたんだよ。そんなに震えて」
「こ、怖い……」
それから、逃げるように、森から走り去った。

その事があってからは、ほとんど森へ来なくなった。
気がつけば1ヶ月近く経っていた。

ドアのノック音。
「剣斬。居るか」
夜龍の声だ。
「居るぞ」
そう返事をすると、夜龍が入って来た。
「居る。とは言ったが、入っていい。とは言ってないぞ」

言いながら、顔がほころぶ。いつも言う、俺の屁理屈。夜龍も笑っていた。
「剣斬。お前、管理者のクセに、何で禁断の森に来ないんだよ。仕事、俺に任せっぱなしかよ」
苦笑いしながら、夜龍は言った。
「いや、色々あって……な」
俺の小さな困惑を察してくれたらしく、それ以上は、何も言わなかった。何も言わず、沈黙が続く。
「……なぁ」
俺は夜龍に話し掛けた。
「ん？」
「今度、一緒に森に行こうぜ」
「おっ！　孤高の戦士様からお誘いとは、珍しい。いいぜ」
その約束をすると、夜龍は帰って行った。

其の四

今日は用事がある。それは、王に呼び出されたこと。何を申されるのかは知らないが……。

俺は大きな扉の前に立った。それを見て、門番の者が扉を開ける。

だだっ広い部屋の奥には王の座る椅子。入ってすぐの左右と、王の椅子の近くの左右には、家来が頭を垂れていた。

だが、よく見ると、王の椅子には誰も座ってない。

「ザガス国王は何処(いずこ)に？」

近くに居た家臣に問い掛けた。

「間もなく来ます故、もう暫くお待ち下さい」

俺は王の椅子の前で、頭を垂れた。

王が来られたのは、その３０分くらい後だった。

「剣斬。面を上げよ」

軽く頭を下げ、王の顔を見る。

「禁断の森に少女が居ると聞いた」

……えっ！？

何故、王が知っている！？

とりあえず、冷静になるように意識した。

「誰にお聞きなされましたか？」

「夜龍である」

……ま、まさか！

夜龍に見つかったのか……。

……無理もない。もう何ヶ月も、あの森へは行っていない。所詮、光が見つかることなど、時間の問題だったのだ。

俺は禁断の森に居る野獣たちを裏切ってしまうと分かっていながら、しらを切った。

「私は、知りませぬ」

「そうか。では、剣斬があの森へ行かぬ間に、紛れ込んだと？」
「定かではありませぬが、その可能性が高うございます」
王は暫く、考えている仕草をしていた。次に何を言うかは、既に決まっているはず。
「では、夜龍が野獣らと共に少女を見逃した、と言うことになれば……。剣斬よ、お前はどうする？」
「……なっ！？」
俺の予想と違う。
俺の予想は、少女を始末する、と申されるはず。なのに……。
「王！　私に、夜龍や野獣たちを斬れと仰せになるのですか！？」
「見逃したとは言え、処罰を下さなかったのだ。始末する他に何がある？」
「……いえ。先程の無礼、お許し下さいませ」
俺がやった、と言えなかった。俺は、禁断の森の野獣たちだけではなく……夜龍までもを裏切った……。

鬱々とした気分で部屋に戻る。部屋の隅にあるベッドに倒れ込む。
夜龍は、唯一の友であり、同士であり、信頼出来る人間である。そんな夜龍を……殺せない。王の命令であろうと、夜龍だけは殺せない。
俺は……どうすればいい？　誰か、誰か教えてくれ！　助けてくれ！　夜龍を殺したくないんだ！　誰か……。誰か！！
心の中で、ありったけの力を振り絞り叫ぶ。
誰にも届かない叫び。
誰にも伝わらない想い。
孤独が増す辛さに、涙が止まらなかった。
「お前は、人の命と王の命令と、どっちが大切なんだよ！？」
樵の言葉が脳をよぎる。
王に忠誠を誓った俺にとって、王の命令は、自分の命より大切だ。

だが、夜龍は、俺のたった一人の、信頼出来る人間だ。

……そうか。

俺が死ねばいい。

其の五（前書き）

グダグダなのを分かっていながら投稿する自分は可笑しいな（汗）

其の五

俺は夜龍と共に、禁断の森へ行った。夜龍は楽しそうに色々話し掛けてくれるが、俺は笑えずに、適当に返事した。

気付くと、既に森の前まで来ていた。俺は何気なく夜龍を盗み見た。

あろうことか、剣を抜いていた。

「夜龍。何で剣を引っ提げて入るんだよ？」

「ん？　王から聞いたと思うが、此処には身元も知らぬ少女が居る。幼いとは言え、容赦は出来んからなぁ。……見つけたら、即排除するためだ」

慌てて制止する俺を無視し、森へ入って行った。それを追う。

「夜龍。待ってってば」

ようやく振り向いた。

「何だよ。慌てて」

「実は……。少女を見逃したのは、俺なんだ。すまん。俺、国王に嘘ついて、お前のせいにしちまった。だから、部屋に手紙を置いてある。自分の罪を白状した手紙だ。それを国王に渡してくれ」

「剣斬。お前、自分で渡さないのかよ」

「俺は此処で、お前に殺される。いや、殺してもらう」

夜龍は困った顔をしていた。

「友人を殺すのは好きじゃない。剣斬。お前、俺に濡れ衣を着せたんだよな？」

「すまない……」

「謝るな。お前が俺を殺せ」

意外な答えに、どうすればいいか分からず焦る。

「な、何を……」

「その代わり、あの少女を別の場所へ移せ」

「何故……？」

「お前が殺さずに生かしておいた人間だ。いい奴に育つだろう」
夜龍が近くの茂みに剣を向けた。
……この気配。
「樵か？」
ひょこっと顔を覗かせた小さな生物は、やはり、樵であった。困惑した表情をしている。
「剣斬。貴様……」
夜龍を見た俺の顔から、血の気が引いていく。彼の顔が怒りで赤黒い染まり、どんな生物よりも恐怖に感じた。それに、雰囲気が殺気に満ちている。
樵は慌てて逃げ出した。
「貴様ぁ！」
夜龍が俺に掴み掛かってきた。
「少女を見逃し、俺に濡れ衣を着せただけではなく、此処の野獣たちとも関係を作っているだと！？　それが、王に忠誠を誓った貴様のやり方か！？　貴様には、責任も誇りも無いのか！！」
そのまま俺は、地面に叩きつけられた。
「っ……」
「剣斬。目を覚ませ。お前は、野獣たちの意のままにされているんだ」
俺はハッとなり、夜龍を見た。
「俺は、お前を失いたくはない。なぁ、剣斬。俺は昔、王に命令されたんだ。いつか、剣斬と共に野獣たちを殺せ、と。今がその時だと俺は思うぜ」
言い終わるのと同時に、野獣たちを捜しに行った。夜龍を追いかけなければいけない事は分かっている。だが、体が動こうとしない。
「剣斬」
樵が出て来た。
「お前、俺たちを……殺すのか？」
怯えたような悲しそうな目で、樵は俺を見ていた。

俺はその質問に、答えられなかった。
「あ”ーー！！」
森の奥から悲痛な叫びが聞こえた。誰かが斬られたらしい。
野獣たちを助けに行くべきか、夜龍の援護に行くべきか……。
「樵。木の上に隠れてろ。お前だけは、俺の手で殺したくないからな」
俺は急いで森の奥へ行った。

其の六

あの湖がある場所で、彼らは戦っていた。数十体の野獣たちと一人の人間。

「夜龍！」

「おぉ！　剣斬。やっとその気になったか」

俺は夜龍に走り寄りながら剣を抜き放ち、その刃先を夜龍へ向けた。夜龍は驚きながらも冷静に構え直し、俺の剣を受け止めた。

「裏切り者め……。いくら本部隊の大佐であろうと、俺には勝てまい」

夜龍が俺の剣を弾いた。余りの力の強さに耐えきれずよろける。その隙を逃すまいと迫る夜龍に向かって走り、お互いの剣をぶつける。

そのまま、何秒か過ぎた。

夜龍の目は殺気立っている。そのせいか、黒い瞳の中で闇が渦を巻いているように見える。

……俺の目は、どんな感じなんだろう。

そんな事を考えていたせいで、力が抜けていた。夜龍は俺を思いっきり吹っ飛ばした。

その勢いに耐えきれず、背中を強打した。

あまりの痛さにうめき声が漏れる。起き上がる間もなく、夜龍は俺の側に立っていた。

「剣斬。俺はお前を許さねぇ！！」

夜龍の剣は、俺の左腿の肉を抉った。

今まで出したことのない絶叫が、血しぶきと共に流れ出る。

初めて味わう痛み。

「う”ぅ”……」

「貴様は確かに強い。生まれながらの剣士だもんな。だが、俺はお前に何か負けん。剣の実力も……忠誠心の強さも！！」

裂帛の奇声を上げると、剣を振りかぶって下ろした。間一髪で受け止めたが、力を入れようとすると腿から血が溢れ出し、力が入らない。
「ぎゃっ！」
夜龍が脹ら脛を抑えた。足下には樵が立っていた。夜龍の脹ら脛にかじりついたらしい。
「おぃ！　おめぇら！　何ボーっと突っ立って見てんだよ。剣斬を助けるぞ！！」
みんなで夜龍に襲いかかったが、呆気なく吹っ飛ばされた。野獣たちが夜龍に勝てるわけない。
痛みを必死にこらえて立つ。
「先ずは剣斬、お前からだ」
剣の刃先を俺の喉元に向けた。
「った」
夜龍の後ろには光が立っていた。夜龍を叩いたらしい。
「……！！　ざけんな！　この、チビが！」
柄で思いっきり光の頭を殴る。光は泣き声も上げず、石を投げ始めた。その一つが夜龍の額に当たり、夜龍は額を抑えうずくまった。
その隙を逃すまいと、奇声を発しながら切りかかる。必死の思いで俺の剣を交わした夜龍の額からは、溢れんばかりの血が流れ落ちていた。
腿が痛くて、集中出来ない……。
痛みをこらえて俺の剣を弾き飛ばした夜龍は、横一文字に剣を振り回した。その一撃が俺の右肩を捉え、血が滴る。
俺が負けじと振り下ろした剣の刃は、夜龍の右足首を切断した。
今までに聞いた事のない、かつて、友だと思っていた者の絶叫が聞こえる。
俺はふらふらと、樵の元へ行った。
「みんなを連れて逃げろ！　俺が時間を稼ぐ。行け！」
「お前は……お前は来ねぇのかよ！？　俺、お前を置いて行け」「

うるせぇ！！　さっさと行きやがれ！　このチビが！」
「なっ……！　俺はチビじゃねぇ！！」
そうやって本気で怒る樵に、歯を見せて笑う。
「あばよ」
俺は出血の止まらない右肩を抑えながら、夜龍に斬りかかった。
夜龍は座ったまま俺の剣に太刀打ちする。この状態なら、俺の方が有利だ。
後ろから、樵がみんなを誘導する声が聞こえる。
名残惜しい。
だが突然、目の前がぼやけた。頭に血が来ない。
出血の量が多くて、体内の血液が少なくなっているのだろうか……。
『剣斬。剣斬……！』
聞いた事もない、女の声がする。
誰かが俺を、抱き締めている気がした……。

其の六（後書き）

一応、第一章は終わりです。話しについてこれなかった方は言って下さい。　第二章を更新するのはだいぶ先になります。

第二章　其の一（前書き）

第二章の始まりですが、更新は遅いです。

第二章　其の一

近くから、荒い息づかいの音が聞こえる。誰かが近くに居るのだろうか。

うっすらと目を開けたが、人の気配はない。俺の目に映ったのは、数本の管のようなもの。

俺の顎から鼻のところに、防具みたいなものがついている。だが、息がしやすい。荒い息づかいをしているのは俺のようだ。

もう一度、静かに目を閉じる。

よく聞くと、ピッ……ピッ……と小さな音がする。まるで小さな鳥が母親を呼ぶかのように……。

ハッと、目を見開いた。

俺は夜龍と戦っていたんだ。樵たちを守るために。なのに何故、こんな所に居る！？

……思い出せない。

力無く、目を閉じる。

……強くなりたい。

自分に言い聞かせる。

……今からでも間に合う。樵たちを助けに行く。

目を開け、口にある防具みたいなものを取って、体中にある管も片っ端から取った。それからゆっくり起き上がり、ベッドに座った状態になった。

左腿や右肩に多少の痛みが残っている。しかし、そんなことを気にしてはいられない。

枕元に置いてある極龍我を、鞘に入れたまま、先だけを床につけた。それを杖にして左足の補助にする。

部屋を出て、壁伝いで適当に歩いていく。

ボロボロになった、ザガス国の印が入っている防護服。右足だけ残っている、ザガス国の印が入った防具。左腕にはザガス国本部隊

大佐の印も入っている。
此処がもし、ザガス国でないとしたら、確実に殺されているだろう。しかし、俺は生きている。だから、もしかしたら、此処はザガス国なのではないか。
そう思ってみる。
角を曲がると、前から誰かが来る気配がした。
少し立ち止まり、様子をうかがう。
向こうも俺に気付いたのか、立ち止まった。よく見ると、見覚えがあるような……。
あれは……！
「光……！？」
立ち止まった奴は、陽気に走って来る。やはり光だ。
知ってる者に会えたのは嬉しい。だが、俺の体は震え上がり、其処へ片膝をつけてへばった。顔から血の気が引いていく。
『剣斬』
何処かで聞いたことのある女の声。顔を上げると、俺から少し距離を置いた所に光が立っている。辺りを見回すが、人間は見当たらない。やはり、光の声なのか。
しかし、見た目より随分大人びた声。光の訳がない。
一応、確認してみる。
「俺に話し掛けてくるのは、光か？」
『うん』
どうやら本当に光の声らしい。未だに信じられないが……。
「樵たちは？」
光の顔を見ずに問う。
『分からない。でも、あの森からは出たはずだよ』
とりあえずは安心だな。
俺は立ち上がり、壁に手をついた。あちこちが余計に痛む。
『大丈夫？』
「此処はザガス国なのか？」

心配されるのは嫌い。
俺は彼女に問いかけた。
『違うよ』
「何故、分かる？」
『だって此処、私のお家だもん』
光はその場でくるくる回っていた。
家にしては大きすぎる。城並みだ。まるでザガス国の城みたいに広い。
……まさか！？
「お前、この国の姫なのか……？」
『当ったりー。私は、このゲルグ国のお姫様で～す』
俺は慌てて跪いた。
「ゲルグ国の姫とは知らず、数々の無礼、お許し下さい」
左腿がズキズキと痛む。
『許してあげる』
「居たぞ！」
後ろから数人のゲルグ国の兵が走って来た。俺はふらふらと立ち上がり、壁にもたれ掛かった。鞘から剣を出し、構える。
兵はすぐに跪いた。
「城内での争いは許さない」
そう言ったのは光だった。
「承知しております故、我々は武器を持っておりませぬ」
確かに、兵の誰一人として武器を持っていない。
「分かってる。剣斬」
俺は後ろを振り返った。
「刀を収めなさい」
「俺はザガス国の人間だ。他国の姫であろうと、言うことは聞かん」
「貴様！　姫様に何てことを言う！」
血液が脈を打った瞬間、左腿の痛みが増した。俺は痛さに耐えきれず、しゃがみこんだ。その床には血の水たまりが出来ていた。

「……！！」
俺は刀をしまった。そしてまた、鞘を杖にして歩き出そうとした。
だが、あまりの痛さに、足が動かない。
「剣斬！　早く、早く部屋に戻って！」
兵が何人か俺の所へ駆け寄って来た。俺はそれを振り払い、左腿を押さえた。
痛みを堪えながら、来た道を戻った。

其の二

部屋に着いた頃には、二人の兵の肩を借りていた。
左腿の出血は止まっていた。知らない間に、止血をしたらしい。包帯がきつめに巻かれている。
ベッドの上におろされると、横になった。
……気持ち悪い。
思いっきり吐きたいが、そんな事も出来ず、ひたすら我慢した。
「剣斬？」
光の方を向いた。
「顔色悪いよ。痛いの？」
首を横に振った。
「じゃあ、どうしたの？」
「は、吐きそう……」
今、口を開けたせいで限界を超えた。だが、冷や汗を垂らしながら、一生懸命我慢する。
光は慌てて兵たちに下がるように言った。そして、近くから桶のような物を持ってきた。
ここからの話しは控えよう。
そんなこんなで一段落ついた。
「……」
「大丈夫？」
俺は頷いた。
それからずっと、光は側に居た。それなのに、体が震えない。これが『慣れる』と言うことか。
……恐ろしい。
「何故、話せるんだ？」
「えっ？」
唐突な俺の質問に、一瞬、目を丸くした。

「今までテレパシーで話してただろ。なのに何故、声を出して話しているんだ？　と、聞いたんだ」
「ああ。そういう事。私、他の国だと声が出なくなるの。何故かは、分からないけど……」
光は苦笑いした。
「じゃあ、何で俺たちは、ゲルグ国に居るんだ？　禁断の森はザガス国に在るんだぞ」
「湖よ」
「湖？　……禁断の森の湖か？」
光は頷いた。
「あの湖、底の方は水が勢いよく流れてるみたい。だから流されて……。気づいたら川に出てたの。不思議な湖だね」
初めて知った。今まで禁断の森に居ながら、全然気付かなかった。
湖の底だから、気付かないのは当たり前かもしれない。
「じゃあ、何故、ゲルグ国の城に居るんだ？　城の近くの川に出たのか？」
「うん」
納得したように、軽く頷いた。
「他に聞きたいことはある？」
聞きたいこと……。
「何故、生きているんだ」
「……私のこと？」
不安げに聞く光の言葉を否定する。
「違う！　俺だ。腿から肩から、それなりに大量の血を流していたはず。だが、俺は生きている。何故だ！？　俺は……あのまま死にたかった！」
ハッと、自分が何を言ったのか思い返す。本当に死にたいと思ったのか？　それなら、いつ……。
ドアが閉まる音がした。
辺りに光が居ない。部屋から出て行ったようだ。

独りになった俺は、しばらく眠った。

目が覚めると、辺りは真っ暗だった。どうやら夜中らしい。
窓を開け、下を見る。
そんなに高くない。
持つ物を持って、壁伝いに降りる。
辺りに見張りの兵は居ない。それを確認して、地面に飛び降りる。
耳を澄ますと、水の音が聞こえた。近くに川があるようだ。
俺はその音のする方へ、小走りに行った。
其処にあったのは、小さな小川。だが、かなり深そうだ。近くにあった棒で川の中を探る。川の中は広い。
俺はその中へ静かに入り、大きく息を吸い込んで、潜った。
川の流れるまま、俺は、流されて行った。

其の三（前書き）

やっと頭が起動し始めました。これからも宜しくお願いします！

其の三

「っ、はぁっ」
随分遠くまで流されたようだ。此処からゲルグ国の城らしき建て物は見えない。
近くでは、もう、東の空が明らんできている。
……此処は、何処だ？
とりあえず、川から上がり、辺りを見回す。
……平地、森、森、山。
俺の目に映ったのは、そんな風景。とりあえず森に入った。
陽は昇ったばかり。
森の中は薄暗く、余所見をしてれば、何処かに頭でも打ちそうだ。
そんなどうでもいい心配をしながら、奥へ進む。すると、どこからか声がするのに気がついた。
音がしないようにそっちへ歩み寄り、木陰からそっと覗く。
そこに居たのは、少女だった。
だが、どこかで見たことある気がする。
何かを探しているようで、あちこちを見回している。その横顔で誰か思い出した。
光だ。
……何でこんな所に居んだよ。
そう悪態づきながら、その場を離れようとした。
「誰か居るの？」
……！　やばっ。
息を殺して、木陰に隠れる。
恐る恐る近づいて来る気配がする。俺の姿は見られていないようだ。
正体が俺だと確認される前に走り去ろう。と言う考えが浮かんだが、行動に出るまで一歩遅かった。

「剣斬！？」
その声に驚き、下を見下ろす。そこには当然、光が居る。
「何で居るの？」
もはや、言い逃れは効かない。だから、正直に話すことにした。
「その……城から抜け出して来た」
苦笑いしながら光の表情を伺う。俯いていて、表情は分からなかったが、強く拳を握り締めている。
間違いなく、怒っている。
俺と目があった瞬間、怒鳴り声を上げた。
「ちゃんと寝てなきゃ傷口が塞がらないでしょ！！　何で出歩くのよ！　大人しく寝てなさい！」
「……はい」
その勢いに圧（お）されて、返事をすることしか出来なかった。
「姫様！　どうなされましたか？」
そこに来たのは、見覚えのある兵たちだった。光の大声を聞いて、駆けつけたらしい。
そいつらが俺を見て驚く。
「なっ！　ザガス国の本部隊大佐が何故、此処に？　ゲルグの城で療養してたはずでは？」
「お城、抜けて来たんだって」
光がそう口にした。
すると、兵の顔が変わった。
「まさか、ザガスへ戻ろうとしていたのか！？　貴様……本当は密偵か何かだろう！　姫様の恩に背くのか！！」
「烏鷹（うたか）、黙りなさい」
烏鷹と呼ばれた兵は小さく頭を下げ、跪いた。
……さすがは姫だな。
心の中で感心する。
「剣斬。ついて来なさい。お城に帰る」
いくら勢いが強く気圧されても、此処まで来たんだ。帰る訳には

いかない。
「俺はザガスの人間だ。悪いが、帰らせてもらう」
そう言い残して、去ろうとした。しかし、上から何かが覆い被さって来て、身動きがとれなくなった。
「なっ！　誰だ！？　退け！」
「うるさい！　姫様の命、故の行動だ！　異議は認めぬ。それに、此処はゲルグ国である故、ゲルグの王族関係者の指示に従え！」
俺は烏鷹と呼ばれた兵を睨みつけた。しかし、返す言葉が見つからない。
俺はため息を吐いた。
「分かった分かった。行けばいいんだろ。行けば」
烏鷹が退いてから立ち上がり、光たちと共に城へ向かった。

其の四

城に入って直ぐ、王の間へ連れてこられた。
その奥にある王の座には、ゲルグ国王が座していた。
「お主が剣斬か？」
「はい」
それからゲルグ国王は、多くの質問を投げかけた。俺はその問いに、全て正直に答えた。
「剣斬、お主は何故、戦士となった？」
「……分かりません」
「分からぬ、とな？」
「はい。生まれた頃より城に居ります故、よく分かりません」
「では、そなたの父は戦士か？」
……父。
俺は父のことを知らん。顔も見たことないし……その存在が、記憶にない。
母の記憶もだ。
……俺は、捨て子なのか？
……分からない。
「私に父も母も居りません。それらが居た記憶も在りません」
「なんと！？　では……。いや、何でもない。傷が癒えるまで、城に居るがよい」
ゲルグ王の言葉は嬉しい。だが俺は、ザガス国に戻らなくてはならない。
「お言葉はありがた」
「剣斬、ザガス国に帰りたいの？」
光が口をはさんだ。
「ああ。ザガス国王も待っているはず」
「でも、あの怖い人居るじゃん」

「怖い人……？」
夜龍のことか。すっかり忘れていた。
……そうか。
夜龍が居るのか。
あいつは、敵との戦いは、どちらかが死ぬまでやる奴だからなぁ。俺を見たら斬りかかって来るだろう。
それに、王はその事で俺をどう思っているだろうか。反逆者と見なした可能性は充分にある。
ならば、帰れないではないか！？
「剣斬」
「っ！　なんだ……」
「何考えてるの？」
「いや……」
俺はゲルグ国王に目をやった。
「ゲルグ国王、お気遣いの言葉、誠に有り難く思っております。しかし、私は行かねばなりませぬ故、これにて失礼い」
王の間の扉が騒がしく開けられ、兵士が一人入って来た。
「ゲルグ国王に申し上げます。ザガス国より使者が参りました」
俺はゲルグ国王を見た。王も俺の方を向いており、俺と目が合うと頷いた。
「通せ」
「はっ」
その使者は、ザガス国王直属の者だった。
そいつが俺を見て驚き、言伝を言うかどうか迷い始めた。
「ザガス国の使者よ。何故、何も言わぬのだ？」
「……」
使者が時々、俺に目を向ける。
「承知している。俺の事は気にするな。……言え」
「……も、申し上げます。ザガス国本部隊大佐、剣斬を見かけ次第……処分せよ。とのことです」

「……なっ！」
あまりにも酷いザガス国王の命に、思わず目を見開いた。
使者は、申し訳なさそうに俺を見る。
「彼がそのようなことを申したのか！？」
「はい」
その後の二人のやりとりは、耳に入ってこなかった。
頭が真っ白になっていた。
「処分……。ザガス国王が……。俺を……。処分……」
気がつけば、その言葉を何回も繰り返していた。
王の間の扉が閉まる音で正気に戻り、隣を見る。ザガス国からの使者は、既に居なかった。
気が抜けて、ため息も出た。
……一体、何のために生きてきたんだ。
……俺は忠誠を誓い、王のために命を捨て戦ってきた。
……それなのに、王は……。
「殺さないで！」
光の叫び声が聞こえた。
「しかし娘よ。これはザガス国王、即ち、剣斬が忠誠を誓った王からの言いつけである。彼は従うであろう」
光が俺にしがみつき、同意を求めてきた。
「剣斬！　死なないよね？　王の命令でも、殺されたりしないよね？」
「……それは、ゲルグ国王次第だ。俺には分からんよ」
笑うことすら出来なかった。
「父上！」
ゲルグ国王は娘に迫られ、困った顔をしている。
「姫様」
烏鷹が光に声を掛けた。
「我々戦士にとって、忠誠を誓った王からの命令は絶対にございます。剣斬殿は、処分される定めに」

「うるさい！」
烏鷹の言葉を遮り、再度、ゲルグ国王に交渉する。
「父上！　命だけでも、助けてください」
「光。少し黙ってろ」
俺は、光を静かにさせようとした。
「だって、処分されるんでしょ？　やだよ。樵たちみたいに」
「あいつらは生きてる！　……きっと。だから、黙ってろ！　王がお考えなされている」
ゲルグ国王は、こちらを見向きもせず、何かを考えてなさる。
暫くと見てると、王がこちらを見た。俺は目を反らさずに、王の目を見る。
「剣斬」
「……はっ」
「お主、我に忠誠を誓え。それが処分内容だ」
「……えっ？」
その言葉に耳を疑い、聞き返してしまった。
「我に忠誠を誓え。と言ったのだ」
俺はゲルグ国王を見た。彼もまた、俺を見ている。
「……私は、この国の勝利のために、自らの命を省みずに戦うことを、ゲルグ国王への忠誠として、ここに誓う」
「その言葉、忘れるでないぞ」
これらの言葉により、俺とゲルグ国王の間に、契約が結ばれた。

第三章　其の一

「剣斬、起きろ。剣斬！」
俺を起こしたのは烏鷹だった。

ゲルグ国王に忠誠を誓い、幾日か経った。そして俺は、大佐補佐という高位を頂いた。
大佐は烏鷹だ。
光の側に居るから、姫の護衛兵とばかり思っていた。しかしそれも、高い身分だからこそ、任されている務めのようだ。
その点は、ザガス国とは全然違う。
ザガス国には王子が居るらしい。しかし、ザガス国王や王妃、一部の者しか見たことないと言う。
一体、どうやって生活しているのか。
それさえ、俺は知らない。
……隣国でも、ここまで違うとは……。やはり世界は広いな。

俺は烏鷹や他の兵たちと共に庭へ出る。
そこから、俺たちゲルグ国の戦士の一日が始まる。
朝から昼まで、同士たちと剣を交える。昼から夜は自己練習、余談など、自由な時間。
ゲルグ国の戦士たちは強い。俺より遥かに強い者たちが何人も居る。
烏鷹もその一人だ。
そして今、烏鷹と剣を交えている。が、勝てない。烏鷹は俺の動きを読み、必ずかわす。
……何故だ！？
烏鷹は錘のついた棒を下ろした。
「剣斬。お前は強いが、動きが遅い。それに変な癖がついているよ

うだ」
「変な癖？」
「斬るところを凝視する癖だ。例えば、腹を斬ろうとするとき、腹を凝視している。『今からあなたのお腹を斬りますよ』と言ってるみたいにな」
　烏鷹は苦笑いした。
　言われてみれば、確かにそうだ。俺は、その目的を凝視する癖があるようだ。
　相手の視線や、ちょっとした目の動きで心を読み取る。さすがは、大佐に位置するだけあるな。と、俺は感心した。
「もう一度、斬りかかって来い！」
　俺は頷き、奇声を上げ、目線に注意しながら斬りかかった。が、上手く当たらなかった。
「俺の目を凝視するな。それじゃあ、斬りたい所が見えんだろ」
「おう……」
　烏鷹の言うとおり、斬りたい所が見えなかった。だから、上手く出来なかったようだ。
「俺が一回……いや、いつもやってるのと同じだが……とりあえず、ゆっくり一回やるから見とけ」
　そう言って、数メートル離れた。
　そこで剣を構え、小走りで来る。今の目線は俺の目だ。
　一瞬、目線を変えた。それが何処を見たのかは分からなかった。
　すると態勢を変えて、一気に走り寄って来た。
　間合いに入ると同時に脚を見た。そして、そこを叩いた。
「痛っ！」
　わざとかは知らないが、烏鷹が思いっきり俺の脚を叩いてきた。
「はは。悪い」
　笑いながら言っている彼に、謝る気はなさそうだ。
「さぁ、剣斬。俺がいつ目線を変えたか、答えてみろ」
「間合いに入る前に一回、間合いに入ってから一回」

「……その答え方なら失格」
「なっ！　何故だ！？」
「間合いに入る前だろうが後だろうが、おおざっぱ過ぎんだよ。まぁ、説教はこのくらいにしよう。……ついて来い。姫様がお呼びだ」
「……え？」
光に呼ばれるのは、初めてだ。そして、彼女に会うのは、俺がゲルグ国王に忠誠を誓って以来だった。
……何の用だろうか？
多少の不安を残しながら、烏鷹について行った。

其の二

俺は烏鷹に連れられて、光の部屋の前まで来た。
「開けるぞ」
烏鷹が俺に確認をとる。
「ま、待った！」
必死に待ったをかける俺を、驚いたように見やる。
「なんだ」
「……姫様って呼ばないといけないのか？」
「当たり前だ。一国の姫だぞ。そして俺たちは、それに仕える兵士なんだぞ。姫様とお呼びするのは当然だ」
……だよなぁ。
俺は深くため息を吐いた。
「姫様。剣斬を連れて参りました」
烏鷹が扉の向こうに居る光に声を掛ける。その返事が来たと同時くらいに、扉が開いた。
扉の隙間から顔を覗かせた光。その雰囲気を表すなら「どんより」が似合うだろう。
「入って……」
失礼します、と言って入る烏鷹に続く。
光はベッドにペタッと座り、ため息を吐いた。
「では、私はこれで」
「……うん」
烏鷹は扉の向こうに消えた。そして、その足音が遠のいてから、呼び出した理由を問う。
「光、どうした？」
そう一言かけただけなのに、光は涙を流し始めた。
すすり泣きをしながら、俺の問いに答える。
「きこ……た、ち。しっ……だ、した……が、た」

「え？　どうした？　はっきり言ってみろ」
光は本気で泣き始めた。だから、泣き止むまで光の頭を撫でてやった。
もう、光に対する恐れがない。こいつの頭に普通に触れられる。
正直、複雑だ。

数分経った。
光は泣くのを止めたが、まだすすり泣きしている。
「ほら、もう一回言ってみろ」
小さく頷き、口を開いた。
「樵たち、近くの海岸に上がってた。みんな……死んでた。血まみれ、だった」
……え？
何のことか一瞬、分からなかった。だが、俺の脳は理解していた。
……樵が死んだ。
受け入れ難い事実。
しかし、それが現実なら、受け止めるしかない。だが……。
「どこで見た？」
受け入れたくない自分が居る。
「東北の海岸に、みんな、死んでた。斬られた跡も、あった」
その光景を思い出したのか、光の目から、再び涙が落ちる。
俺はその言葉を信じたくなかった。
だから、この目で見たい。確かめたい。
その死体が、樵たちでないことを。
「光、俺をそこまで連れてってくれ」
光はゴシゴシと目を擦りながら聞いた。
「な、んで？」
「……お前の言葉、受け入れることが出来ない。だから、俺に現実を見させてくれ」
俺は土下座をして頼んでいた。

それだけ樵たちを信頼していたことに、初めて気づいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1877h/

仮)極龍我

2010年10月9日01時59分発行